

私は 5 月 25 日から 6 月 12 日の 3 週間にわたって、自分自身の母校で教育実習を行いました。実習中に学んだこと、自分に教員として不足している部分も多くありましたが、実習の直前指導や実習後の報告発表会も私にとって、有意義なものになりました。

直前指導においては、班やクラスで実習に対してどのように取り組めばいいのか、また、取り組む上で注意すべきこと、教材研究の方法、指導案の作成方法などについて意見を交換し合い、議論しました。

その際、私が最も焦点を置いたことが授業案についてです。私は模擬授業を数回、経験していましたが、実際に生徒の前で行う教壇実習において、自分の考えている授業が成立するのか、少し不安でした。私は授業を作る際、常に導入において、どのように生徒の関心を引き付けるのか試行錯誤するのですが、今回の実習で私が授業をさせてもらった中学校社会科歴史の幕末から明治維新の分野にかけては、生徒の関心を引き付けることができる効果的な導入を思いつくことができませんでした。そして担当した学年が受験生である第 3 学年だったので、導入は前時の復習を中心とした内容としました。

もう 1 点、私が実習前に重要視したことは、生徒とのコミュニケーションの取り方についてです。私はこれまで、中学生と接した機会がほとんどなく、生徒との信頼関係を築く上でもコミュニケーションの方法について考えを巡らせていましたが、緊張せずに、いつも通りの自然体の自分であることを心掛けることに決めました。

実習校の雰囲気や様子は非常に様変わりした印象を受けました。1 年生、2 年生が 2 クラスずつ、3 年生が 3 クラスの全校生徒 300 人にも満たない生徒数で、私が在学していた時よりも人数が減少していました。また、生徒は授業や学校生活において、規律を遵守しており、遅刻に対する指導などは厳しくなっていました。

そして、生徒は全体的に毎日、生き生きとした様子で過ごしており、実習生である私自身もその生き生きとした雰囲気に包まれ、3 週間の実習の中で辛いこともありましたが、生徒のそのような姿にとっても励まされました。

実習内容としては、授業見学と教壇実習が中心でした。実習第 1 週目は時間の許す限り、授業見学を行い第 2 週目以降は教壇実習と授業見学の両方を行いました。

授業見学では様々な学年の様々な科目を見学しましたが、特に導入においてどのような工夫がなされているのか注目していました。授業では映像を投影するスクリーン機器などの ICT 機器も一部使用されていました。また科目や先生によって、同じクラスでも生徒の集中力、授業態度に差異がある印象を受けました。

教壇実習においては、実習前に授業範囲の指導案を作成していたのですが、はじめは全く自分の計画していた指導案通りの授業にはなりません。特に生徒の反応の予想、発問、指示の方法について改善点が多く、また、授業内容を 50 分の中で大きな 1 つの流れにしなければ、生徒には歴史の流れが伝わらないことが、はっきりとわかりました。授業の中で歴史の大きな流れを作ることが、この実習における私自身の最大の課題でした。また、生徒の反応は非常に素直で、こちらが伝えたいことがうまく伝わっていないことを、はっきりと肌で感じ取ることができました。しかし、指導教諭の方の献身的な指導を受けながら、授業案を改善することで、研究授業の際は最も筋道の通った授業を行うことができました。

朝の会の 15 分間は「朝の読書活動」にあてられ、教室に入ると生徒は既に読書をしてい

る状態で、教師である自分自身も読書してから職員室に戻るといった流れでした。終礼では3年生だったこともあり、高校のオープンスクールの案内などの配布物が非常に多かったので、適宜、生徒に手伝ってもらったりなど、効率よく終礼を行うための工夫に取り組みました。

また、6月1日から6月3日までの3日間は3年生が修学旅行であったため、その期間には教壇実習を行うことができず、2年生のクラスに3日間だけ、朝の会、昼食指導、ホームルーム、終礼、その他の授業を見学させてもらいました。2年生の生徒は3年生の生徒に比べて、話し方や授業態度において違った印象を受けました。実際の現場では、学年やクラスによって教室の雰囲気が全く異なることを痛感しました。また、2年生の方が実習生に話しかけてくる頻度が多く感じました。

2年生の総合的な学習の時間も見学することができました。授業内容は、宿泊学習の宿泊先について新聞記事を作るための調べ学習でした。生徒は各々、特産品や動植物について自由に調べていましたが、関係のないことをインターネットで調べている生徒が、数名見受けられ、その生徒に本来やるべきことに注意を促すことが少し難しかったです。

特別支援学級の見学も貴重な経験でした。そこでは比較的軽い障害を持った生徒が授業を受けており、授業は2コマ連続で行われていました。教室には遊び道具などが置いてあり、適宜、授業の合間に休憩を入れて、自由時間を設けることによって、生徒が無理せずのびのびと勉強することができる工夫がされていました。

また、実習中に体育祭に参加できたことも、私にとって非常に有意義なものになりました。これは自分が教師として、生徒の行事活動に貢献するためには、どうすればよいのか考える良い機会となりました。それに加えて、生徒の普段とは違った姿を見ることができるといことが率直に楽しみでもありました。教師は予行準備や事前準備などで、本部や生徒応援席の位置、当日のタイムスケジュール、雨天時の予定変更など把握しなければならない内容が多く、予定変更などの対応にも非常に苦労しました。しかし、苦労しながらも、1つ1つの事柄に一生懸命に取り組む姿勢は決して崩さないようにしました。当日は生徒と応援席から声援を送りながらも、体育祭の進行状況や生徒の次の行動をあらかじめ把握することに尽力し、天気にも恵まれ、無事に体育祭を終えることができました。

最終日には、担当クラスの生徒から寄せ書きが書かれた色紙をもらいました。1つ1つのメッセージが心をこめて書かれており、とても感動しました。3週間の実習を振り返ってみると、教科指導に関しては課題が山積みですが、生徒とのコミュニケーションにおいては、やはりいつも通りの自分のままで接すればよいということがわかりました。そして苦労したことも多々ありましたが、教師という道を選んで心の底からよかったと思いました。

実習を終えた後、3回にわたって実習体験報告会を行いました。各班の報告を聞く中で、学級数、生徒数、教育方針、授業方法など学校によって様々な特色がありました。

私と同様に、全体を通して、教壇実習における課題に関する報告が多かったのではないかと思います。教材研究や発問、板書などで困難に直面した実習生は私だけではないはずです。しかし、大切なことは今後、自分がどのように自分自身の授業を改善するかだと思います。授業は生徒との信頼関係を築く上で、最も大事なことだと信じています。そして、生徒との信頼関係を築くことは、教師と生徒との良好な関係を作るために必要なことです。そのためにも、授業案の改善は、この実習の最大の課題であると私自身、痛感しました。

また、私自身の反省点は、実習中に部活動にほとんど参加することができなかったこと

です。放課後は実習簿への記入、翌日の授業の準備、修正などで忙しく、結局、サッカー部と吹奏楽部しか活動を見ることができませんでした。それだけが少し心残りです

実習報告の中で、いじめや定時制高校についてなど、もう少し詳しくお話を聞きたかったテーマも随所に見受けられました。特にいじめ問題は近年、問題視されている重要なテーマであり、教師という職に就くかどうかに関わらず、これからの日本を支える私たちにとって看過することができない問題だと思います。時間は限られていますが、自分の実習中においては浮上してこなかった生徒問題や教育現場の課題について、再度、別の機会に共有したいという気持ちになりました。

私は教育実習から多くのことを学ぶことができました。実習中は生徒や先生方の前で頼りないところを多くの場面で見せてしまいましたが、生徒は最後まで私のことを慕ってくれて、先生方は最後まで私のことを支えてくれました。私はこの実習で、教師という仕事の難しさを痛感しました。しかし、私の中では、ここまでやりがいを感じることができる仕事は他にはありません。何より、生徒の何気ない日常や笑顔を見ていると、こちらまで励まされているような気がします。私は生徒にとって、一生に一度しかない、何気ない学校生活というものを大切にしていなければならない気がします。そのために私は教育実習から学んだことを生かし、課題を克服して、さらに教員としての資質を高める必要があります。自分のことを頼りにしてくれた生徒のみんなのためにも、私は素晴らしい教師になることを約束したいと思います。実習校の先生方や生徒のみんな、周りで自分のことを支えてくれた人たちに対する感謝の気持ちを忘れずに、そして、現場に出た後も、決して教育実習で培ったものは忘れずに、これからも自分を信じて努力し続けることを惜しみません。